きました。大きな柳の木が川岸に並木を作っており、青黒い柳の枝にトンボの羽が月の光に輝いて見えます。眠っているトンボをつかまえるのが夜の散歩の収獲でした。

こういうわけで川に関するイメージは、川口川の方が多いのです。小さな舟を持って居りましたので、家の前から町の中の流れにそって方々へ行きました。今の二高の前の堀から浄真寺裏の堀、今の伊勢屋の前、安定所の前を通り小桜橋、大町と田宿の境の簀の子橋、川口川を通って霞ケ浦等、特に小桜橋のあたりは川巾が広くなっており、砂地でしたのでシジミなどをとった思い出が幼な心にもなつかしく残っております。今の人達に話しても信じられないほど、土浦の町中、川をつたって舟で行くことが出来たのです。町の中を縦横に流れていたきれいな川、柳の並木、行き交う小舟、水郷という名にふさわしい町でした。

桜川の方は、幼稚園、小学校と毎年春の遠足に行ったものです。年少組は大町の道祖神の土手で弁当をひろげ上級になるほど遠く虫掛の関のあたりまで土手の桜のトンネルをくぐって歩きました。桜川の桜は、明治時代三好町と大町の銭亀橋附近に植えられたのが古く、大正三年、大正天皇御即位の御大典を記念して、中城町、田宿町、大町の青年会の有志が、三好町からどうろく神までに植えたのが土浦の桜の名所になるはじまりです。

現在も栄町の排水機のそばの草むらの中に記念碑が残っており、当時桜を植えた青年達の名が刻まれて居ります。桜の最盛期は、大正末期から昭和十年前後まででした。当時桜まつりには、土手に茶店が立ちならび、ダンゴ、酒などを売り、土手の上も、川の中も人でいっぱいでした。川には屋形船も浮び、芸妓の三味の音にまじって酔客のうたもきこえ、桜まつりの期間中は、水郷汽船の臨時の蒸気船で〝通運丸〟という外輪船が桜川橋―虫掛橋の間を上下して、浮き浮きした花見気分をあおって居りました。夜は夜桜見物、桜の花のトンネルの下に各商店から広告のボンボリがつけられ、多い時は五百個にもなりました。ボンボリに照らされた桜の花が、夜空に浮び上って夢のような夜景でした。

桜のトンネルは上流約三里（十二キロ）の間続いており、楽しいハイキングコースを作っておりました。今の